



2023年「コスモス国際賞」  
—自然と人間との共生—  
受賞候補者推薦のお願い

コスモス国際賞委員会  
公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会内  
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2-136  
TEL:06-6915-4513 FAX:06-6915-4524  
email:rec-cosmos@expo-cosmos.or.jp





## コスモス国際賞

### ■創設

1990年に大阪で開催された花の万博を記念し、その理念である「自然と人間との共生」の継承、発展を目的に1993年に設立した国際賞です。

### ■趣旨

人間が自然を尊び、これと調和しながら生きる「自然と人間との共生」というEXPO'90のテーマは、地球上のすべての生命あるもの、および、その生命活動を支える地球を一体のものとして捉え、この「地球丸」の航路を、正しく見定めようとするアピールでした。

このような共生のあり方の理解のためには、すべての生命現象に通ずる多様の中の統一性、生命体と地球との相互依存の関係性を解明することが重要です。しかし、この解明には、これまでの科学の主流であった分析的、還元的な方法だけでは不十分であって、統合的、包括的な手法による新しい取り組みが必要です。

我々はとくに、地球的視点からの統合的な方法論の重要性を提起したいのです。そして、この研究分野における優れた業績を発掘し評価し、これを顕彰することによって新しい価値観の潮流を促進し、その結果を人類共通の稔りある土壌たらしめたいと思います。

花は緑の精、緑は生命の象徴です。コスモス国際賞は、その理念を発展させ、地球と人類の明日に貢献したいと願っています。

### ■顕彰対象

人間が自然を尊び、調和しながら生きる「自然と人間との共生」という理念の継承、発展に寄与する業績を顕彰します。これまでの分析的、還元的な研究だけでなく、21世紀の新しい科学的視点、つまり統合的、地球的な視点、または長期的な視点に立った業績に光をあてるものです。

授賞の対象分野は、自然科学、人文・社会科学や芸術的分野まで多岐にわたります。

### ■選考

内外の学識経験者等からなる「コスモス国際賞委員会」とそのもとに「コスモス国際賞選考専門委員会」を設けています。それらの組織で世界各国からの推薦が審査され、受賞者が決定されます。

### ■賞の内容

毎年、原則として1個人または1チームを表彰します。受賞者には賞状、メダルと副賞4,000万円を贈ります。

### ■名称

賞の名称「コスモス」は、秋桜(コスモス)が咲き乱れる会場で閉幕を迎えた花の万博を記念する意味と、その理念である「自然と人間との共生」の考え方につながる「秩序ある宇宙」(Kosmos)を示しています。

## コスモス国際賞受賞候補者推薦要項

### 1. 授賞の対象

花と緑に象徴されるすべての生命現象に関し、地球的視点における生命体相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究や業績が対象です。

具体的には、自然界における生命のさまざまなありよう、および、それらと人間とのかかわり、自然の一員としての人間の文化や文明活動等に関する研究や業績であって、「自然と人間との共生」の理念の発展に貢献すると認められるものを対象とし、以下の基準に基づいて選考を行います。

<対象とする分野>

- ①自然科学、人文・社会科学など幅広い分野の研究。
- ②賞の理念に関連する思想、芸術、評論等の業績。

<選考で重視する点>

- ①地球的視点に立ったものであること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても普遍性があること。
- ②直接的な問題解決型ではなく、長期的な視点をもつものであること。
- ③包括的、統合的な方法によるものであること。

### 2. 候補者の資格

国籍、人種、性別、信条を問いません。ただし、現存者に限ります。  
推薦人は自薦できません。

### 3. 推薦の手続き

#### ■同封の推薦書ご利用の場合

推薦内容ご記入の上、郵送、メール添付にてお送りください。

#### ■WEB推薦ご利用の場合

花博記念協会ホームページの「2023年コスモス国際賞WEB推薦について」より「A. WEB推薦フォーム」もしくは「B. MS Wordファイルのダウンロード」のどちらかを選択し、ご入力・ご送信ください。

**ログインパスワード：お送りしております推薦依頼書に記載**

複数件のご推薦も受付いたします。

候補者の業績に関する参考資料もできる限り添付していただきますようお願いいたします。推薦資料は返却できませんので、ご了承ください。

### 4. 推薦の有効期間

ご推薦いただいた候補者は、3年間、本賞の候補者として資格を持ちます。

ただし、COVID-19の影響により、2020年の候補者選考を中止したことを考慮し、2018年～2020年にご推薦いただきました候補者の選考資格を、それぞれ1年間延長しております。

■2023年の賞選考対象：2020年、2021年、2022年、2023年に推薦された候補者

### 5. 推薦締め切り **2023年4月14日(金)(必着)**

### 6. 送付先および問合せ先

コスモス国際賞事務局 担当：大栗 TEL：06-6915-4513 FAX：06-6915-4524  
(公財)国際花と緑の博覧会記念協会 email：rec-cosmos@expo-cosmos.or.jp  
〒538-0051 大阪市鶴見区緑地公園2-136 HP：https://www.expo-cosmos.or.jp



## 歴代の受賞者 2022年～1993年 (肩書きは受賞時のものです) 2020年はCOVID-19の影響により、選考中止



2022年(第29回)受賞者

フェリシア・ケーシング博士  
アメリカ バード大学教授

2022 Prize winner  
Dr. Felicia Keesing

David and Rosalie Rose Distinguished Professor of Science, Mathematics, and Computing, Bard College, USA

フェリシア・ケーシング博士は生物多様性と人獣共通感染症病原体の伝播リスクとの関係を、実践的な調査研究により解明した。生物多様性の高い生態系はさまざまな病原体の温床となりうるが、総体としては感染症のリスクを下げる希釈効果が存在することを示し、生物多様性が人間の社会にとって価値あるものであることを、明らかにした。

この研究業績は、生命体の相互関係を探り、ポストコロナ時代における「自然と人間の共生」の在り方に示唆を与えるものである。



2021年(第28回)受賞者

ピーター・ベルウッド博士  
イギリスおよびオーストラリア オーストラリア国立大学 名誉教授

2021 Prize winner  
Dr. Peter Bellwood

Emeritus Professor, Australian National University, Australia

ベルウッド博士は、考古学、言語学、人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間の共生の歴史を統合的な視点から探究した。



2019年(第27回)受賞者

スチュアート・L・ピム教授  
アメリカ デューク大学教授(保全生態学)

2019 Prize winner  
Prof. Stuart L. Pimm

Doris Duke Professor of Conservation Ecology, Duke University, USA

ピム教授は、地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等について、数理モデルを利用することにより理論的に明らかにし、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えてきた。また、NGO「セービング・ネイチャー」を立ち上げ、生物保全活動プログラムを実践する団体を支援するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を果たしてきた。



2018年(第26回)受賞者

オギュスタン・ベルク博士  
フランス フランス国立社会科学高等研究院教授

2018 Prize winner  
Dr. Augustin Berque

Director of studies at the EHESS (École des Hautes Études en Sciences Sociales), France

ベルク博士は、和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学(mésologie)」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。



2017年(第25回)受賞者

ジェーン・グドール博士  
イギリス ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

2017 Prizewinner  
Dr. Jane Goodall

Founder, Jane Goodall Institute, U.K.

グドール博士は、1960年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は99カ国で約15万団体が、その活動を展開している。



2016年(第24回)受賞者

岩槻 邦男博士  
日本 東京大学名誉教授

2016 Prizewinner  
Dr. IWATSUKI Kunio

Professor emeritus, The University of Tokyo, Japan

岩槻博士は、生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。



2015年(第23回)受賞者

ヨハン・ロックストローム博士  
スウェーデン スtockホルム・レジリエンス・センター所長

2015 Prizewinner  
Dr. Johan Rockström

Executive Director, Stockholm Resilience Centre, Sweden

ロックストローム博士は、人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。



2014年(第22回)受賞者

フィリップ・デスコラ博士  
フランス コレージュ・ド・フランス教授

2014 Prizewinner  
Dr. Philippe Descola

Professor, the Collège de France, France

デスコラ博士は、人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アチュアの自然観とその自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。



2013年(第21回)受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士(物故)  
アメリカ ワシントン大学名誉教授

2013 Prizewinner  
Dr. Robert Treat Paine (Deceased)

Professor emeritus of Zoology, University of Washington, U.S.A.

ペイン博士は、生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。博士の一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。



2012年(第20回)受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士(物故)  
アメリカ ハーバード大学名誉教授

2012 Prizewinner  
Dr. Edward Osborne Wilson

Pellegrino University Research Professor Emeritus at Harvard, U.S.A.

ウィルソン博士は、アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動している。





2011年(第19回)受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会  
事務局:アメリカ

2011 Prizewinner  
Scientific Steering Committee of the Census of Marine Life, Secretariat:U.S.A.

海洋生物センサス科学推進委員会(SSC)は、海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測することを目指す壮大な国際プロジェクト「海洋生物センサス」(Census of Marine Life:CoML)を主導した。



2010年(第18回)受賞者

エステラ・ベルゲレ・レオポルド博士  
アメリカ ワシントン大学生物学部名誉教授

2010 Prizewinner  
Dr. Estella Bergere Leopold  
Professor Emeritus, Department of Biology, University of Washington, U.S.A.

レオポルド博士は、父アルド・レオポルド氏(1887-1948)が提唱した「土地倫理」を継続、追求すると共に、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。また、現在でも人々の暮らしと社会の中に土地倫理を組込む活動を続けている。



2009年(第17回)受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士  
アメリカ スタンフォード大学教授

2009 Prizewinner  
Dr. Gretchen Cara Daily  
Professor, Stanford University, U.S.A.

デイリー博士は、人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。



2008年(第16回)受賞者

ファン・ゲン・ホン博士  
ベトナム ハノイ教育大学名誉教授

2008 Prizewinner  
Dr. Phan Nguyen Hong  
Professor Emeritus, Hanoi National University of Education, Vietnam

ファン博士は、アジアにおけるマングローブ研究の第一人者である。戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、博士はマングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。中でもカンザー地区のマングローブ林再生・保全は世界で類のないものである。



2007年(第15回)受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士(物故)  
イギリス ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長・教授

2007 Prizewinner  
Dr. Georgina Mary Mace(Deceased)  
Director and Professor, NERC Centre for Population Biology, Imperial College London, U.K.

メイス博士は、人間活動の自然に対する脅威を訴え、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献するとともに、絶滅のリスクを削減するための長期的なビジョン策定に取り組んでいる保全生物学の第一人者である。とりわけ、絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、現在のIUCN(国際自然保護連合)のレッドリストの根拠となる理論、およびレッドリストのワシントン条約による効果的運用は、メイス博士の功績によるものである。



2006年(第14回)受賞者

ラマン・スクマール博士  
インド インド科学研究所生態学センター教授

2006 Prizewinner  
Dr. Raman Sukumar  
Professor, Centre for Ecological Sciences, Indian Institute of Science, India

スクマール博士は、人口増と都市化が急激に進むインドにおいて、生物多様性の保護と自然環境全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行している。博士の多くの学術的業績の中で、ゾウと人間との生態関係および両者の軋轢への対処をテーマとした研究は、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みとして国際的に認められている。



2005年(第13回)受賞者

ダニエル・ポーリー博士  
カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所教授兼所長

2005 Prizewinner  
Dr. Daniel Pauly  
Professor and Director, Fisheries Centre, University of British Columbia (UBC), Canada

ポーリー博士は、熱帯の水産資源管理から、その研究をスタートさせたが、現在では視野を広げ、世界中の海洋生態系に対して漁業がもたらす長期的な影響を調べている。漁業と海洋生態系との関連を包括的に追及する研究を通して、海洋学や漁業分野で広く使用される方法やソフトウェア、データベースを作り出すなど、海洋生態系の保護とそれに基づく水産資源の管理の分野で極めてすぐれた業績を修めた。



2004年(第12回)受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授  
メキシコ メキシコ国立自治大学教授

2004 Prizewinner  
Prof. Julia Carabias Lillo  
Professor, National Autonomous University of Mexico (UNAM), Mexico

カラビアス教授は、メキシコ国立自治大学で環境科学分野の教鞭をとる一方、熱帯雨林の再生、資源の管理、環境の保全などに関する研究を続けた。1992年の地球サミットでは、報告書『地球のために』の起草委員会の主要メンバーであった。彼女が作成した自然資源を枯渇させることなく、住民の生活を向上させる研究プログラムは、メキシコで大きな成果を挙げ、世界の発展途上国で自然環境を守りながら、貧困の救済に役立つ普遍性を持つものとして評価した。



2003年(第11回)受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士  
アメリカ ミズーリ植物園園長

2003 Prizewinner  
Dr. Peter Hamilton Raven  
Director, Missouri Botanical Garden, U.S.A.

レーブン博士は、1960年代から地球上の数多くの生物が絶滅の危機にさらされていることに注目、人類が生存していくためには、地球における生物の多様性を保全することが不可欠であることを、世界で最初に提起した植物学者の一人である。米国最古の植物園でありながら寂れていたミズーリ植物園を世界の植物学の中心的な機関に育て上げた功労者であり、また科学の一般社会への啓蒙面でも功績を挙げた。



2002年(第10回)受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所  
エクアドル ガラパゴス諸島

2002 Prizewinner  
Charles Darwin Research Station  
Galapagos Islands of Ecuador

チャールズ・ダーウィン研究所は、1964年の設立以来、ガラパゴスの陸上、海域両面にわたる生物と生態系の調査を行ない、絶滅の危機に直面していたゾウガメなどの保護と増殖をはじめとする島の自然を守る直接活動のほか、島の住民への環境教育、島の現状を全世界に伝える出版など、多角的な活動で大きな成果を挙げてきた。地球の生物進化のひとつの原点ともいえるガラパゴスの学術研究と自然保護とを両立させている研究所の活動は、世界の人たちに、地球上の生命とその進化について考えるための極めて大きな貢献を果たしてきたといえる。





2001年(第9回)受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授  
アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

2001 Prizewinner  
Prof. Anne Whiston Spirn  
Professor, Massachusetts Institute of Technology, U.S.A.

スパーン教授の地域計画に対する基本姿勢は、「都市と自然は対立するものではなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築は可能である」というものである。1998年に出版した『The Language of Landscape』では、自然と人間とのより良きかわりの中で、美しい環境を持続し、創造することでできると主張している。教授の研究は、「都市の自然環境」というテーマを「都市と自然の共生」を実現することによって解明しようとするものとして評価した。



2000年(第8回)受賞者

デービッド・アッテンボロー卿  
イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者、動物学者

2000 Prizewinner  
Sir David Attenborough  
Producer, Naturalist, Zoologist, U.K.

デービッド・アッテンボロー卿は、今世紀における野生生物ドキュメンタリー映像のバイオニアであり、最高の製作者である。アッテンボロー卿の作品は、欧州をはじめ世界中で放映され、高い評価を受けている。それぞれの作品は、珍しい生きものや変わった生態を美しい映像で捉えるにとどまらず、生物の進化と多様な生態、生存競争と生物間の相互依存など、地球生命の本質にかかる明確なテーマを持ち、全作品を通じて生命に対する畏敬の念とその本質に迫ろうとする強い探究心に貫かれている。



1999年(第7回)受賞者

呉 征鎰(ウー・チェン・イー)博士(物故)  
中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

1999 Prizewinner  
Dr. Wu Zheng-Yi(Deceased)  
Professor and Director Emeritus, Kunming Institute of Botany, Chinese Academy of Sciences, China

呉博士は、60年以上にわたり、一貫して中国を中心とする東アジア地域の植物の種の多様性の調査研究に取り組み、地球上で植物の種が最も多様な地域のひとつである中国全土の植物の種多様性を網羅する全80巻、125分冊におよぶ大スケールの研究文献『中国植物誌』の編纂を主導した。また博士は、植物と人間のかかわりが社会的な問題としてほとんど認識されていなかった1950年代から、植物相や植生など生物多様性の豊かな中国で自然を詳細に解析し、その知見に基づいて生物多様性の保全に貢献した。



1998年(第6回)受賞者

ジャレド・メイソン・ダイヤモンド博士  
アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

1998 Prizewinner  
Dr. Jared Mason Diamond  
Professor, University of California at Los Angeles, U.S.A.

ダイヤモンド博士は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部で生体の生理学研究を行なう一方、フィールドワークによる進化生物学および生物地理学の研究に取り組み、過去40年間に、ニューギニアを中心に現地調査を行ない、自然の生物と人間のかかわりについて、数多くの論文を発表してきた。このようにフィールド研究の成果を基に、さらに、地球規模の人類の生態研究へ視野を広げ、13,000年前から現在に至る人類発展の歴史を地域別に再構築し、地域によって異なる人類の発展について、新しい視点からの考察を加えた著書『銃・病原菌・鉄』を発表、国際的な注目を集めた。



1997年(第5回)受賞者

リチャード・ドーキンス博士  
イギリス オックスフォード大学教授

1997 Prizewinner  
Dr. Richard Dawkins  
Professor, Oxford University, U.K.

ドーキンス博士は、1976年に出版された著書『利己的な遺伝子(The Selfish Gene)』で、世界の生物学界に大きな衝撃を与えた。それは、この地球上のすべての生き物が、遺伝的なものの絶えざる競争によって出現し、存在し、そして進化してきたという主張で、「調和した自然界」という、それまでの生物学の常識をくつがえす極めて大胆な仮説であった。ドーキンス博士の主張は、生物の進化について、これまでとは全く異なる新しい見方を提示したもので、世界の生物学や遺伝学の研究に、さまざまな論争を呼び続けている。



1996年(第4回)受賞者

ジョージ・ビールズ・シャラー博士  
アメリカ 野生生物保護協会科学部長

1996 Prizewinner  
Dr. George Beals Schaller  
Director of Science, the Wildlife Conservation Society, U.S.A.

シャラー博士は、1950年から現代に至るまで、40年間にわたって、世界各地で、マウンテンゴリラ、ライオン、ジャイアントパンダやユキヒョウなど、さまざまな野生動物の生態と行動を現地の調査を通して研究し続けてきた学者である。博士の研究の成果は、学術論文として動物学の研究発展に大きく貢献しただけでなく、1963年に刊行された『マウンテンゴリラ:生態と行動』から、1993年『ラストパンダ』に至る多くの著書にまとめられて、一般社会人から子どもまで、全世界の多くの人たちに、野生動物の生活の実態を知らせる、極めて大きな役割を果たした。



1995年(第3回)受賞者

吉良 龍夫 博士(物故)  
日本 大阪市立大学名誉教授

1995 Prizewinner  
Dr. KIRA Tatu (Deceased)  
Professor Emeritus, Osaka City University, Japan

吉良博士は、自然環境の基盤をなす世界の気候と植生型の分布を定量的に表現する生態気候区分の研究から出発して、各種の生態現象を定量化するユニークな研究業績をあげた。第二次世界大戦後は、いち早く東南アジア各地(タイ・カンボジア・マレーシア・インドネシア)の熱帯林生態系の現地研究に取り組み、この分野の先駆者として活躍した。これらの研究を通じて、とくに植物群落(主として森林)の有機物生産力に注目し、生態学の新分野としての「生産生態学」の確立に大きく貢献した。



1994年(第2回)受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士(物故)  
フランス パリ国立自然史博物館教授

1994 Prizewinner  
Dr. Jacques François Barrau (Deceased)  
Professor, Paris National Museum of Natural History, France

バロー博士は、南太平洋のニューカレドニアで幼年時代を過ごしたが、その体験が基となり、太平洋の島々について強い関心を持つようになった。そしてフランス本国で大学を卒業した後、ニューカレドニアを拠点として、約20年間にわたり、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシアなどオセアニア地域に属する島々の自然と人々の暮らしについて、さまざまな角度から民族生物学的な調査研究を行なった。特に、太平洋の島々の食用植物に関する研究は、国際的に高い評価を受けた。



1993年(第1回)受賞者

ギリアン・プランス卿  
イギリス 王立キュー植物園園長

1993 Prizewinner  
Sir Ghillelan Prance  
Director, Royal Botanic Gardens, Kew, U.K.

プランス卿は、1960年代から南米アマゾン地域を中心に熱帯植物の研究を続け、植物分類学、民族植物学、有用植物学など多方面にわたる研究で国際的な業績をあげた。多年の調査と研究を基に、熱帯植物のあらたな集成をめざす新熱帯植物誌の編集を担当、さらに地球の全地域の植生を統一のとれたデータベースとして集大成する、地球植物誌の計画を提唱し、その実現のために積極的な努力を続けた。ニューヨーク植物園在任中、そして王立キュー植物園園長に就任してからは、植物園の運営をとおして、植物と人間のかかわりを求める幅広い社会教育活動に力を尽くした。

## コスモス国際賞 委員会・選考専門委員会

---

### コスモス国際賞 委員会

(2022年10月現在)

委員長	尾池 和夫	静岡県立大学理事長・学長
副委員長	山極 壽一	総合地球環境学研究所所長
委員	秋道 智彌	山梨県立富士山世界遺産センター所長
〃	浅島 誠	帝京大学特任教授
〃	池内 了	総合研究大学院大学名誉教授
〃	白山 義久	京都大学名誉教授
〃	武内 和彦	公益財団法人地球環境戦略研究機関理事長
〃	中西 友子	東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター特任教授
〃	西澤 直子	石川県立大学学長
〃	林 良博	東京大学名誉教授
〃	鷺谷 いづみ	東京大学名誉教授
〃	和田 英太郎	京都大学名誉教授
顧問	岩槻 邦男	東京大学名誉教授
〃	岸本 忠三	大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授
〃	中村 桂子	JT生命誌研究館名誉館長

### コスモス国際賞 選考専門委員会

(2022年10月現在)

委員長	白山 義久	京都大学名誉教授
副委員長	池谷 和信	国立民族学博物館教授
委員	池邊 このみ	千葉大学大学院園芸学研究科教授
〃	モンテ・カセム	国際教養大学理事長・学長
〃	亀崎 直樹	岡山理科大学生物地球学部教授
〃	佐倉 統	東京大学大学院情報学環教授
〃	ケビン・ショート	元東京情報大学環境情報学科教授
〃	高村 ゆかり	東京大学未来ビジョン研究センター教授
〃	辻 篤子	中部大学特任教授
〃	横山 潤	山形大学理学部教授